



Osaka Gakuin University Repository

Title	『草の豎琴』研究 コリンの新しいエデンの探求 A Study of <i>The Grass Harp</i> : Collin's Quest for New Eden
Author(s)	山口 修 (Osamu Yamaguchi)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 66 号 : 21-44
Issue Date	2013.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

『草の豎琴』研究 コリンの新しいエデンの探求

山 口 修

序

トルーマン・カポーティの『草の豎琴』(*The Grass Harp*, 1951)は、F. J. ホフマンが、“its dealing ‘with the fact of innocence’ makes it part of a long literary tradition in American fiction”(Stanton 179)と指摘し、H. S. ガーソンが、“The struggle between innocent naturalness and restrictive societal values is basic to the meaning of *The Grass Harp*” (63)というように、アメリカ文学に特徴的な「自然」対「文明」というテーマを内包するイニシエーションストーリーという点で、ウィリアム・フォークナーの短編「熊」(“The Bear,” 1942)や、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885、以下『ハック・フィンの冒険』)と同じ系譜に属するといっていだらう。しかし、『草の豎琴』は主人公が文明社会に入っていくという点で、これらと大きく異なっている。

アメリカは、エデンというイノセントな世界を目指しながらも、一方、発展し続けることでそのイノセンスを失っていくという矛盾を抱えている。また、多種多様な人々が住む多面的な社会である一方、「自由」と「平等」という建国の理念を掲げ一元化を目指す社会でもある。その矛盾をどのように解決するかということは、アメリカ文学の主要なテーマの一つである。このことを念頭に置きつつ、本論では、まず、『草の豎琴』がどのような点で、前述の二作品と同じアメリカ文学の伝統に連なるのか、特にエデンの探求というテーマを中心に考察する。「エデン」という語は、「アメリカのアダム」、「イノセントな子

ども」というイメージを喚起し、そこで大人は子どもを保護するという重要な役割を持つ。フロンティアが消滅し、自然の多くが失われ、文明が圧倒的に勝利しつつある社会で、コリンはどこにエデンを見いだしたのか、エデン発見に至る過程で大人はどのように関与していくのか、元田脩一の『エデンの探求』を援用しながら考える。そして、なぜコリンが自然を離れ、文明社会の中で弁護士を目指すことになったのかを、ドリー、クール判事という二人の精神的指導者（メンター）が果たす役割を検討し、建国の理念と関係づけながら、考察したい。

1

まず、アメリカ文学に見られる子ども観を考察し、それが、先に挙げた「熊」と『ハック・フィンの冒険』にどのように反映されているのか見ていこう。

R. W. B. ルイスは、『アメリカのアダム』(*The American Adam*, 1955)で、アダムが無垢性を強調する。鈴木透は、「アメリカ文化の中で子供という素材、題材は特別な意味を持っている」(58)と述べ、ルイスの主張を次のように要約している。

アメリカ人の中には、歴史の浅い国たるアメリカが建国の理想を捨てずに悪と腐敗に染まらないで欲しいという意識があって、子供のイノセンスを守りたいという思いがひときわ強いという。つまり、アメリカという国自体が子供の段階であり、そのままであるべきだという考え方が社会の中に根強く存在しており、逆にいえば、個人が墮落した大人へと成長することにより、社会全体が汚れ、アメリカの理想が遠ざかっていくことへの抵抗感がそれだけアメリカ人の意識の中に根強いというのである。(58)

「自然」対「文明」というテーマの底流には、新しいエデンの探求とともに、

そこでイノセンスを守りたいというアメリカ人の無意識が反映されていることが示されている。

アメリカが理想とする子ども観は、例えば産業化が進む19世紀前後には、子どもは原罪を受け、生まれつき墮落しているというカルヴィニストの見方から、ジョン・ロックやジャン＝ジャック・ルソーの啓蒙思想、子どもは守られるべきだというロマン主義的な考え方まで、様々であった（竹市・鈴木 79）。そのルソーの思想とは、P. J. カヴニーが、“Rousseau’s great contribution was . . . to direct its interest towards childhood as the period of life when man most closely approximated to the ‘state of Nature’” (42)、あるいは、“for Rousseau, the ‘original nature’ of the child was innocence” (44)と指摘する無垢な「自然」重視の思想である。その後、公教育運動が展開していく中、「アメリカ公立学校の父」と呼ばれるホーレス・マンが、「子供の内部にある善性を育む」ことが教育において重要と考え、「ジェファソン以来の建国指導者達が基本的に有していた理念、『自由』、『平等』の下にすべての国民に教育を普及することの実現」（遠藤・森田 136）を目指したことからわかるように、当初、性悪説に基づいて子どもは躰けるべきだと考えられていたが、むしろ保護すべきだと、考えが改められた。このように、原初の無垢をもった自然状態に最も近い存在としての、すなわち、建国の理想を体現するアダムに象徴される「イノセントな」存在としての子ども観が、アメリカの教育思想、文学には反映されている。

そのイノセンスを守る者として、大人にはどのような役割が求められていたのだろうか。以下、林信弘のエミール論を基に、ルソーの教育思想、教育者像を見ていこう。（ルソーの引用は林訳を使用。）林によれば、ルソーの教育思想は、精神は経験から観念を得るという感覚論的経験論に基づいたものである。経験を经ずに、大人から「ことば」だけで教えられる知識は、「不誠実な知識」であり、「人間相互の意思疎通をむつかしいものに」（19）してしまうものだった。したがって、教師によって一方的に行われる「注的知識学習」（36）には

否定的で、「若い人たちへの教訓はすべて、ことばでよりもむしろ行動で示す方がいい」(37)というように、経験を重視した。

その教育はどのようになされるべきか。ルソーは、「消極教育」、すなわち、「既成の社会制度、既成の文化体系の枠組みのなかで子どもを教育することを拒絶し」、子どもをそのような環境から分離したうえで、「自己の多様な能力を自由に開花・結実させ、自己のなりうるところのものになるように援助」する教育を提唱した(55)。

子どもを導いて行くのは子ども自身であり、子どもが取り組んでいる当の問題それ自身であって、教師はその背後に退くのである。教師はあれこれと説明したり指図したりしてはならない。子どもがすることをじっと見守っていればそれでよい。(中略)少しは彼を指導してやりたいと思うならば、そのときにはほんの少し適当なチャンスを見つけて暗示を与えてやるがいい。(41)

教育者としての大人は、第一義的な役割として、子どもの自主的な経験を重視し、保護者として子どもを見守ることが期待されるのだ。

そのようなルソー的な教育観が色濃く反映されているのが、元田脩一が『エデンの探求』の中で取り上げた作品である。元田は、「熊」のサム・ファーザーズ、『ハック・フィンの冒険』のジムなどを取り上げ、イニシエーションの援助者としての大人の役割について論じている。

事実、われわれは、ジムとサム、ハックとアイクとを見比べるとき、彼らの共通点からそれぞれ一人の人物像を抽出することができるのである。その一人は、合理主義や科学思想とはおよそ無縁の理想化された自然人で、彼は自然に生きていくための知恵と人間固有の美德の具現者だ。われわれはこの理想化された自然人を「老いたるアダム」と名づけよう。もう一

人は、「老いたるアダム」の指導のもとに自然を場として人間固有の美德を体得する白人の若者である。「老いたるアダム」がほとんど社会から孤立した文明の疎外者であり、有色人種の一員であるのに反し、このアメリカの若者は「老いたるアダム」を父とし、自然を母として精神的再生を遂げる文明人であり、「老いたるアダム」の美德を文明社会にもち帰って、社会の汚濁に対する道徳的反逆者となるのである。われわれはこの若者を「若きアダム」と呼ぶことにしよう。そして、この「若きアダム」が「老いたるアダム」の美德を受けついでその精神的な子となり、母なる自然と親交する世界こそ、アメリカの小説のなかで最も明確に描き出された「エデン」なのである。(6-7)

元田は、合理主義とはおよそ無縁の理想化された自然人たる「老いたるアダム」の指導により、白人の若者が、自然の中で人間固有の美德を体得するというこの物語を「再生の神話」と呼んでいる。

「若きアダム」を再生させる役割を果たすのが、自然人たる「老いたるアダム」である。このとき、「老いたるアダム」はどのように美德を体得させるのか。元田はその過程をキリスト教の儀典形式になぞらえ、次のように要約する。

- 第一段階 「若きアダム」の文明浄化による原始的自然の世界への参入—バプチズム
- 第二段階 母なる自然に対する「若きアダム」の親交—コミュニケーション
- 第三段階 「若きアダム」の「老いたるアダム」に対する連帯の確認による社会悪との対決—コンファメーション (7-8)

「熊」の主人公アイクについて、このプロセスを辿ると、原始林に住む大熊との出会いの場面で、アイクは熊と遭遇するために文明の利器である時計と磁石を手放す。「このときアイクは白人たることをやめ、文明人としての彼は—

時死んだ」、「いわば原始人となった」というのが第一段階 (8-9)。

第二段階は「彼の子犬が無鉄砲にも大熊に立ち向かっていったときの場面」である。その犬を救うべく駆け出したアイクは気がつくと自分が大熊の真下にいるように感じられる場所におり、ここでアイクは「大熊はもはや彼が畏敬の念をもって眺めた『荒野の異神』ではなく、さながら懐かしい母親のごとく」彼を見おろしていることに気づき、その瞬間、「大熊を通して母なる自然と親交」したことになる (14-15)。

第三段階は、回想場面で語られる。師であるサムに導かれ、「大熊の前で荒野の美德を修得したこと」、その一方で、「自分がその後継者となっている農園が祖先たちの犯した罪悪の累積のために汚染」されていることを知り、「もしそれらの汚濁や邪悪から彼を解放してくれたものがあるとすれば、それこそ白人の祖先たちがその土地を奪い追放し、あるいは虐待し蹂躪したところの、異民族の後裔であるあの孤独な老人にほかならなかった」ことを明確に自覚する。そこで彼は農園を放棄することで、自らの自由を獲得する (17-18)。

『ハック・フィン冒険』のハックも、ジムという迷信深い黒人の「異神の洗礼を受けたのちグレンジャーフォード家に滞在して南部貴族の宿恨を体験し、再び河に逃れてジムとともに星空を見上げる場面」で、「コミュニケーション」を体験する。

ここには、母なる自然にいだかれた田園牧歌的な父と子の姿があり、「エデン」が見事に描き出されている。「少年とニグロの奴隷は一つの家族を、原始的共同体を形成する。一そしてそれは聖者の社会である」とはトリリングの言葉であるが、確かにここで浮彫りにされているものは、美化され理想化された原始的家族の光景といえることができる。(中略)そしてここでハックと一緒に星空を見上げているのは、「ニグロの奴隷」としてのジムではなく、ハックの精神的な父としてのジムなのだ。(19-20)

自然と文明の境界に位置するマージナルマンたる異神との間に、自然を媒介に精神的連帯を感じることが白人である少年たちにとって大きな成長の契機となっているのである。

ではこの時、異神たるサムとジムは少年にどのような教育を施しているのだろうか。まずサムから見えていこう。中沢新一によれば、古来、熊と人間の間には深い結びつきがあった。

純粋な「神話的時空」などというものがあるとしたら、そこは人間と熊という友人同士がたがいに見返りを求めない贈り物をしあうことによって、深い相互理解と友愛によって結ばれている、夢のような時空ができあがることでしょう。(90)

と述べている。中沢の主張する対称性社会では、熊が毛皮や肉を贈与するのに対し、人間は狩りの作法を重んじ、アイヌの「熊送り」のように、熊に儀礼的行為で敬意を払う形で返礼をする。¹ こうして人間は自然からの恵みを享受する。これは昔から行われてきた神話的思考に基づく自然と人間の関係の仕方であり、そのような装置を通じて自然と人間は中沢のいう対称性を維持してきた。

アイクが時計と磁石を放棄し、荒野に身を委ね、自然と真摯に向き合う時、熊への敬意が払われ、古来の装置が起動する。そうして、アイクは大熊との邂逅を果たす。このような一連の手順をアイクに伝えるのがサムなのである。サムは、長い伝統の中で受け継がれてきた自然とのコミュニケーションの方法について、アイクに森の掟を実体験させながら適切にアドバイスする。アイクを信頼し、自主性に任せ、何かを強制することはない。

では、ジムはどうか。黒人奴隷であるジムが、ダグラス未亡人やミス・ワトソンがハックを教化しようとしたように、教師然としてハックに教育を行うようなことはない。彼はただ自ら感じたことをハックに告げるだけである。濃霧で離ればなれになった後で、ハックが死んだのではないかと悲しんでいたジム

を、お前が夢を見ていただけだといって、ハックが騙す場面がある。その嘘がばれたとき、ジムはハックに次のようにいう。

En when I wake up en fine you back agin', all safe en soun', de tears come en I could a got down on my knees en kiss 'yo' foot I's so thankful. En all you wuz thinkin 'bout wuz how you could make a fool uv ole Jim wid a lie. Dat truck dah is *trash*; en trash is what people is dat puts dirt on de head er dey fren's en makes 'em ashamed. (121)

あんたがぴんぴんして無事で帰ってきているもんで、涙が出てきて、おら、ひざまずいてあんたの足に接吻してくれえだった。おらそれほど有難かっただ。それなのに、あんたが考えていることは、ジムめを騙して馬鹿にしてやろうてことだけじゃねえか。そこのがらくたはごみくずだ。ごみくずたあ、友達の頭に泥を塗って恥ずかしい思いをさせる人間のことさ。(元田訳を参考に一部改変)

これは黒人奴隷、白人という枠を超えた、人間としての心からの言葉である。

小屋の中に入ったジムを見てハックは、“But that was enough. It made me feel so mean I could almost kissed *his* foot to get him to take it back” (121)と感じる。このような体験を経て、ハックは逃亡奴隷ジムを密告するかどうかを迫られる場面で、“I'll go to hell” (272)とジムと運命をともにしようと決断する。「慣習的権力」(元田 26)で奴隷を売り払ってしまうようなミス・ワトソンの言葉とは全く異なるものなのである。ミス・ワトソンたちの教育、大人から「ことば」だけで教えられる知識は、「不誠実な知識」とするルソーの考え方を裏付けるものである。

このように、異神たちは少年たちを外部から強制的に教化しようとするのではなく、大自然の中での経験を通して彼らの内面に、既成の価値観からまった

く自由な感情が自然と湧き上がるのを見守るだけである。ジムにいたっては、自分がメンターであることに気づいてさえいないかもしれない。これは、まさにルソーが理想とした教育そのものだといっていいだろう。

では、その結果、彼らはどのような成果を得たのだろうか。一つは、既成の価値観、つまり白人中心主義、自然軽視の文明中心主義、からの自由であり、もう一つは、一瞬ではあるが「エデン」を体験したことである。少年たちは、黒人、白人、ネイティブアメリカン、といった区別自体が極めて政治的、恣意的なものであり、自然の中では、そのような区別が全く無意味なものであることを自覚する。これは、人間と自然は連続性を有するという神話的思考に基づいた考え方である。自然の中で、彼らは既成の価値観から自由になると同時に、これらの人々との共存がアメリカの理想たる平等を実現したエデンであるということに気づくのである。

しかし、文明の発展とともに自然は失われ、大熊の住む森は破壊され、フロンティアも消滅してしまった時代にあって、見いだされたエデンは永続することはなく、アイクは隠遁し、ハックはわずかに残された自然を求めて逃走することになる。こうして彼らは、文明社会を拒絶するのである。

2

次に、『草の豎琴』において、ルソー的子ども観、教育観がどのように描かれているか見ていこう。この作品もまた、ルソー的思想を背景にしているという点で、前述の二作品と同じ伝統の流れを汲むものである。

『草の豎琴』では、元田の指摘する三段階のプロセスがどのように実行されているのだろうか。元田の「異神」は、非白人であり、男性であった。以下、本論ではこの「異神」についてももう少し幅広い視点で捉えたい。この作品で「異神」の場に位置するのは、ドリーやキャサリンだと考えられる。彼女たちとサム、ジムとの共通点は、いずれも文明社会と自然との境界に存在するマージナル(ウー)マンであり、文明よりも自然に精通し、自然を具現化する存在だ

という点である。つまり、ドリーの妹ヴェリーナや村の住人たちが押しつける、白人中心主義や利己的な経済主義といった既成の価値観に染まっていないという共通点がある。「異神」の役割が、少年の既成の価値観からの解放であるなら、彼女たちを「異神」の位置に据えることは妥当だと考える。

ここではドリーについて詳しく見ていこう。コリンと出会った頃のドリーは、部屋で会っても“folded like the petals of shy-lady fern” (11)と背景の中に溶け込んでしまう存在で、顔は“snowflake” (13)のようで、声も“sapsyrup through the old wood” (13)のように流れ出るとも穏やかな女性であった。ドリーは幼い頃、ジプシーを助けた際に、お礼として薬草を混ぜ合わせた水腫薬の作り方を教えてもらうが、そのせいか、彼女は自然についてとても詳しくかった。

About all natural things Dolly was sophisticated; she had the subterranean intelligence of a bee that knows where to find the sweetest flower: she could tell you of a storm a day in advance, predict the fruit of the fig tree, lead you to mushrooms and wild honey, a hidden nest of guinea hen eggs. She looked around her, and felt what she saw. (14)

このように繰り返されるドリーと自然との結びつきは、ドリーが「自然」対「文明」という二項対立の中で、「自然」の側に属することを表している。ドリーの親友キャサリンは自称インディアンである黒人で、彼女の話す言葉はドリーにしか聞き取れず理解されない。キャサリンを自然人と捉えるなら、ここにもドリーの自然解読者としての役割が見て取れるだろう。

一方、強烈な個性を持ち、家を切り盛りするヴェリーナは、ドリーとは対照的な存在である。

Verena, too, could make the kitchen sad, as she was always introducing a new rule or enforcing an old one: do, don't, stop, start: it was as though we were clocks she kept an eye on to see that our time jibed with her own, and woe if we were ten minutes fast, an hour slow: Verena went off like a cuckoo. (15)

規則、時計に象徴されるように、彼女は文明側の人間なのである。後に、モリス・リッツなる人物と製薬工場を立ち上げるが、これも利益を最優先する資本主義経済という文明に毒されているからだ。このような対比的な描かれ方から見ても、ドリーが「異神」の位置にいてと考えて問題はないだろう。

前述の儀典形式に基づいて見ていくと、第一段階、第二段階ともに物語冒頭からコリンは自然の側にいる。一日の大半をドリーやキャサリンとともに過ごし、森と親しみ、薬草作りの助手をするコリンたち三人は、自分たちが住む共同体から距離を置く存在だった。コリンは、物語冒頭自ら語るように、ドリー同様、“Indian grass”の奏でる“grass harp”を聴くことができるほど自然と一体化していたし、モリス・リッツの胡散臭さを直感的に嗅ぎ取るが、これも「文明浄化」されているがゆえのことであろう。「自然との親交」は、河の森（River Woods）にある樹の家で毎週のように行われた。そこは、“a raft floating in the sea of leaves” (16)とハックの筏を思わせる場所であり、“to sit up there was to sail along the cloudy coastline of every dream” (16)と現実から切り離された異界であった。また、“as though we floated through the afternoon on the raft in the tree; we belonged there, as the sun-silvered leaves belonged, the dwelling whippoorwills” (17)とあるように、自然との一体感を感じられる場所でもあった。このような一体感に至る過程で、ドリーからコリンへ強制的な教育は行われていない。森での体験を通じて、コリンは自然に森の掟を学習していった。この点では、ジムとの生活から学んだハックと同じだといってよい。

だが、このような平穏な日々は、水腫薬製造の機械化という文明の侵入によって侵害され始める。ヴェリーナは現在の自分の働きで十分に生活しているにもかかわらず、水腫薬の大量生産による一儲けを企む。彼女は“All for you!” (22)とドリーのためであることを強調するが、ドリーは“let this one thing belong to me” (22)とあってその申し出を拒否する。神話的思考の論理では、最小限必要なもののみを自然からいただく、という原則が重視される。ジプシーがドリーに薬の伝え方を伝授したのも、彼女はその論理を十分理解していると判断されたからだ。必要以上のものを自然から収奪する文明の側の論理にドリーたちが納得するはずはなく、両者は対立する。その結果、彼女らは森へ逃走する。

儀典形式の第二段階、第三段階は、この樹の上に新しい参加者が増えるに従って、それぞれが自然との親交、「老いたるアダム」との連帯を体験する中で、繰り返される。コリン、ドリー、キャサリンの三人は、樹上生活を始めることになるが、儀典への参加者はこの三人だけではない。不幸な生い立ちを背負った青年ライリーが偶然彼らを見つける。彼も共同体内で疎んじられているマージナルマンだが、ドリーに声をかけられ彼は樹の家へ上がってくる。

Usually, glimpsed on the street or seen passing in his car, Riley wore a tense, trigger-tempered expression; but there in the China tree he seemed relaxed: frequent smiles enriched his whole face, as though he wanted at least to be friendly, if not friends. Dolly, for her part, appeared to be at ease and enjoying his company. Certainly she was not afraid of him: perhaps it was because we were in the tree-house, and the tree-house was her own. (28-29)

自然そのものである「異神」ドリーの懐に入ること、ライリーもまた「コミュニケーション」を経験していることがわかるだろう。

ヴェリーナの意図を汲んだ保安官や牧師夫妻、判事といった面々がライリーから居場所を聞きつけ、ドリーたちに帰宅を促すべく樹の家にやってくる。しかし、彼らはドリーたちに対して偏見を抱いており、中でも牧師夫妻の言動は、ハックに説教するダグラス未亡人やミス・ワトソンの姿と重なる。経験に裏付けられることのない空疎な言動なのだ。

そんな中、ドリーたちに同情的なのが、クール判事だ。彼は、次のように描写されている。

He might have been put together from parts of the tree, for his nose was like a wooden peg, his legs were strong as old roots, and his eyebrows were thick, tough as strips of bark. Among the topmost branches were beards of silvery moss, the color of his center-parted hair, and the cowhide sycamore leaves, sifting down from a neighboring taller tree, were the color of his cheeks. (34-35)

彼もまた自然を具現化した存在なのである。重い病気にかかった妻と旅行に出かけるが、戻ってきたときには、町の策士たちによって彼の働ける場所は無くなっていた。年老いた身となつてからは、財産を譲った二人の息子の家の間を行ったり来たりするような毎日で、判事もやはりマージナルマンである。

判事は次のように語る。

“It may be that there is no place for any of us. Except we know there is, somewhere; and if we found it, but lived there only a moment, we could count ourselves blessed. This could be your place,” he said, shivering as though in the sky spreading wings that cast a cold shade. “And mine.” (37-38)

それに対してコリンは、“Surely, of the four of us, it was the Judge who had most found his place in the tree. It was a pleasure to watch him, all twinkly as a hare’s nose, and feeling himself a man again, more than that, a protector” (38) と述べている。自然の中で判事は自分の居場所を見つけ、また人間としても再生する。彼も儀典への参加者なのである。

ここで、樹上生活の主導権が、一時的にドリーから判事へと移動しているように思われる。判事は、“the law doesn’t admit differences” (41)といい、過去に黒人娘との結婚を望んだ漁師を裁く可能性があったことを思い出す。これまで法に基づいて弱者を差別するような、間違っただけに立ってきたことを反省し、判事になるべきではなかったと我が身を振り返る。“I sometimes imagine all those whom I’ve called guilty have passed the real guilt on to me: it’s partly that that makes me want once before I die to be right on the right side” (41)と、過去の過ちを踏まえた上で正しいことをしたいという。ここで彼は法律家として、ヴェリーナたちと戦おうとしていることに注意しておきたい。“I’m in charge. . . . This is a matter for the law” (33)とあって、ドリーたちを樹から引きずり下ろそうとする保安官に対して、判事は“Whose law, Junius? . . . We have no legal right whatever to interfere with Miss Dolly” (33)と言り返す。実際、ドリーたちは何ら法律に違反していない。しかし、ヴェリーナたち町の者たちの意志が、彼女たちを裁こうとする。このような理不尽に対して、彼は「法律」という「文明」の側に立って、コリンたちを守ろうとするのだ。判事は「自然」と「文明」、それぞれを表象する両義的な存在だということも重要な点である。

彼がこのような認識に達するのは、彼に誤った判断をさせてきた既成の価値観とは異なる価値観が存在することに、樹上生活で気づき、異なる人物たちとの間に連帯感を感じたからだ。これまでの自分とは異なる視点から法律を適用することによって、正しいこと、つまり差別をなくすことができるということに気づいたとき、判事は、アメリカの理念の実現に一步近づく。判事の望み

は、“a person to whom everything can be said” (41)になることであるが、人はなかなか自分の正体を明かしたがらず、他者から自分を隠すのに無駄なエネルギーを使っていると述べた後で、次のようにいう。

“But here we are, identified: five fools in a tree. A great piece of luck provided we know how to use it: no longer any need to worry about the picture we present—free to find out who truly are. . . . [I]t’s the uncertainty concerning themselves that makes our friends conspire to deny the differences. By scraps and bits I’ve in the past surrendered myself to strangers.” (41)

自らを他者に切り売りしてきた過去とは異なり、ここに集まった人々の前では、自分自身で、自分が何者であるかを見いだすことができる。他者を気にすることなく、自分で自由に自分の生き方を決められるということに判事は気づく。こうした精神の自由こそ、建国の理念の自由へと通じるものである。

そして判事は愛について、次のように語り始める。

“We are speaking of love. A leaf, a handful of seed—begin with these, learn a little what it is to love. First, a leaf, a fall of rain, then someone to receive what a leaf has taught you, what a fall of rain has ripened. No easy process, understand; it could take a lifetime, it has mine, and still I’ve never mastered it—I only know how true it is: that love is a chain of love, as nature is a chain of life.” (44)

一人の人間を愛するということは、一枚の葉や一降りの雨をも愛すること。愛とは、このような自然への愛を起点とする愛の連鎖であることを判事は学ぶ。²彼は樹上生活であらためてそのことを自覚する。このような新たな価値

観の創造へ大きな役割を果たしたのが、「異神」であるドリーであった。こうして判事は彼自身が「若きアダム」となると同時に「老いたるアダム」として、ドリーとともに彼よりもはるかに若いコリンを導いていく。老若男女、白人、黒人といった区別無く平等に存在し、他者を気にせず自らの自由に生きられる場所、こここそが、彼らにとってのエデンなのである。

3

しかし、そのエデンは長続きしない。物語は儀典形式第三段階、連帯の確認による社会悪との対決へと移行する。翌朝、コリンとライリーがナマズを捕りに行っている間に、保安官らによってキャサリンが連れ去られてしまう。どうすることもできなかった判事とドリーは悲嘆に暮れる。ここまでコリンは語り手として以上の役割を物語の中でほとんど行っておらず、ドリーやキャサリンの後追いをするだけで自発的な行動はほとんど見られなかった。しかし、この場面で“is it that after all the world is a bad place?” (50)というドリーの質問に、コリンは次のように答える。

The Judge focused his eyes on mine: he was trying, I think, to tell me how to answer. But I knew myself. No matter what passions compose them, all private worlds are good, they are never vulgar places: Dolly had been made too civilized by her own, the one she shared with Catherine and me, to feel the winds of wickedness that circulate elsewhere: No, Dolly, the world is not a bad place. (51)

コリンは自分のいる場所がエデンであることを再確認するとともに、これまで一方的に愛情を受け取るばかりだったドリーへの気遣いを示す。樹の上という自然の中での生活が、彼の成長を促したのは間違いない。

コリンの成長は次の箇所にも窺われる。キャサリン逮捕という新たな知ら

せにドリーは、“It’s better you know it now, Collin; you shouldn’t have to wait until you’re as old as I am: the world is a bad place” (56)と、悪意に満ちた世間の存在を、彼女自身初めて認識したかのように語る。それに対する判事の反応をコリンは見逃さない。彼は、“A change, like a shift of wind, overcame the Judge: he looked at once his age, autumnal, bare, as though he believed that Dolly, by accepting wickedness, had forsaken him” (56)と語る。しかし、彼は、“But I knew she had not: he’d called her a spirit, she was really a woman” (56)と、判事とドリーの間築かれた信頼関係を、男女の大人の関係を踏まえた上で、しっかりと理解していることがわかる。二度の“I knew” (51, 56)が示すように、邪悪な世界であっても、個人間に堅固な愛情があれば、世界はよいものだということをコリンは確信しているように思われる。

ライリーと町の様子を探りに出たコリンは、ヴェリーナがモリス・リッツに騙されたという情報を得る。そして森へ帰る途中、シスター・アイダという、子どもたちの一団を引き連れた女性に出会う。彼女は生活のための献金を稼ぐ集会を町で開くが、牧師たちがヴェリーナをも巻き込んで集会禁止命令の発令を要求したため、献金を没収され、町を追い出されたところだった。自分と他人の子どもをたくさん連れて旅するアイダに同情したコリンは、何とかしてやりたいと思う。しかし、ドリーを訪ねていくつもりだというアイダに、信頼するライリーまでもが“a loose woman like that was no one to associate with Dolly” (67)と嫌悪感を示す。差別意識から他者に愛情を示さないライリーを不満に思いながらも、やむなくコリンはその場を立ち去る。

戻ったコリンはドリーに事情を説明し、再びドリーが異神の役割を引き受ける。牧師たちに騙されたヴェリーナが、自分を口実にしてアイダから金を巻き上げたこと知ったドリーは怒り、即座に会いに行くことを決断する。

困窮するアイダに会ったドリーは、判事の援助を求めるため、彼女たちと一緒に樹の家へ戻っていく。こうして、新たにアイダ一行が、森の生活の参加者として加わる。嫌悪感を示していたライリーも、一行を歓迎しようと料理作り

に夢中になる判事を見て、共に料理を作るうちにいつの間にか態度を改める。アイダが、食事の前に体を洗いにいくよういったとき、一人の女の子がパパがおんぶしてくれなければ行かないとぐずり、“You are too my papa” (71)とライリーにおんぶをせがむ。ライリーは拒むことなく彼女を自分の肩に乗せて小川まで連れて行く。アイダを森に迎えるというドリーの決断が、再びライリーを成長させることになる。

保護者として、ドリーも判事もコリンやライリーに干渉することはなかったが、シスター・アイダも、“Sister Ida relaxed and left the children at liberty” (72)とあるように、判事やドリーとともに子どもたちを優しく見守るだけだ。

Sister Ida chose a place on the bank from which she could supervise the bathing. “No cheating now—I want to see a lot of commotion.” We did. Suddenly girls old enough to be married were trotting around and not a stitch on; boys, too, big and little all in there together naked as jaybirds. It was as well that Dolly had stayed behind with the Judge; . . . (71-72)

再び、コリンの前にエデンが現れたのである。そして大人になった彼が過去を振り返るとき、この風景が一枚の絵となって彼の前に現れることになる。

Those famous landscapes of youth and woodland water—in after years how often, trailing through the cold rooms of museums, I stopped before such a picture, stood long haunted moments having it recall that gone scene, not as it was, a band of goose-fleshed children dabbling in an autumn creek, but as the painting presented it, husky youths and wading water-diamonded girls; and I’ve wondered then, wonder now, how they fared, where they went in this world, that

extraordinary family. (72)

この認識に至るまでに、大人がコリンに何かを教え込んだ訳ではない。彼女たちを助けるべきだと行動したドリーや判事に導かれ、エデンを発見したのである。

拡大された家族の互いの連帯が確認され、社会悪との対決が再び始まる。しかし、保安官の仲間の一人にライリーが撃たれたことにより争いは収束へと向かう。ライリーが運び出され、アイダたちが再び旅に出発した後で、ヴェリーナは樹の家に登ってくる。そこで、ドリーと互いの心の内をさらけ出すことによって、ヴェリーナも、コミュニケーションを体験し、連帯を得る。そして、ドリー自身、姉妹愛を再認識するのである。自然の中での連帯を確認した彼女たちは、樹の家を後にする。

以上見てきたように、コリンも自然の中で異神の援助を受けながらエデンを発見したという点では、アイクやハックと同じように、自然の中で成長する子どもという、アメリカ文学にたびたび登場する子ども像と同じ系譜に連なる。

4

このような経験をした後で、コリンはなぜ弁護士を目指したのだろうか。ドリーが亡くなり、キャサリンも完全に隠遁してしまい、もはや自然の中でのエデンの再建は起りえない。自然が失われていく時代背景の中で、新たにエデンをどのように再生すればよいのだろうか。ここで、今一度アメリカ建国時の理念、教育思想に立ち戻ってみよう。

遠藤らによると、トーマス・ジェファソンの「教育の個人的な期待は、18世紀の啓蒙思想の影響による自然権思想を根本原理として発想されており、その立場は、コンドルセ、あるいはルソーと言った思想家に共通するように、(理想的) 国家・社会への関心と言う政治的期待の濃い」(136)もので、「被教育者個人の成長と幸福を目的とする教育への期待」を示し、「教育を人間個人の自

由と幸福を守る道具」(131)と見なしていた。このように建国の理念を実現させるための教育が初期の段階から重要視されていた。

その理念を実際に社会の中で実現するにはどうするか。自由、平等の理念は独立宣言にも反映されているが、文明社会にあつて、自由で、平等な世界を築くには、具体的な行動規範となる法律の役割が大きい。先に注目したように、クルー判事は「自然」の中にあつて、「法律」という「文明」の側に立って、コリンたちを守ろうとした。弱者の視点から、法律を適用すべきであったと反省し、自由、平等、人権を守ろうと決意していた。

アメリカが建国の理論的根拠としたルソーであるが、佐伯啓思は、その社会契約説による法の制定を次のように説明している。

ルソーによると、社会契約は、まったく完全に一人ひとりの人間の自由意志に任されており、しかも彼らはまったく対等なのです。その対等な人間が共同で防衛体としての国家をつくり、彼らがすべて主権者として法をつくるわけです。(131)

「一般意志」—「すべての人が共通にもっているような意志」(123)—という抽象的概念に基づいて「法」がつくられるが、それは、共通の利害や関心を持った人々によってつくり、*「すべての人がそれに共通なかたちでかわり、対等でありうるような共通のルール」*(129)である。つまり、アメリカが建国の理想を達成するには、国民たる市民の意志によってつくられた法律が、万人に平等に適用されなくてはならない。逆に言えば、平等に適用されなければ、理想の国家は実現されないことになるのである。

また、ジョーゼフ・キャンベルは、同一民族で構成される社会には一種の神話があると述べる一方で、多民族社会アメリカについては次のように説明する。

But in America we have people from all kinds of backgrounds, all in

a cluster, together, and consequently law has become very important in this country. Lawyers and law are what hold us together. (10)

神話無き現代文明社会アメリカにおいては、法律が国民を結びつける手段となることを指摘している。この状況の下で、コリンは弁護士を選ぶことになるのだ。

結論

コリンが森の中で、ドリーやキャサリンたちと、またシスター・アイダたちと過ごした空間は、一瞬ではあるが、人々が人種や年齢を超え互いに対等な理想郷、エデンであったことは間違いない。読者がこの場面に共感するのも、登場人物たちの意志と読者の持つ意志とが共鳴するからだろう。だが、文明の侵攻とともにやはり森はそのエデンを永続させるだけの力を持ち得なくなってしまった。彼は、森での生活で実現された理想を文明社会の中に再現するために、法律という手段を選ぶ決意をしたのだ。キャンベルのいうように法律こそが国民を結びつけるものだからだ。

彼がその決断に至るまでには、やはり自然を表象するドリーという異神の存在が必要であった。最後に判事からアドバイスをもらっていることが語られていることからわかるように、判事の実存も大きかった。判事自身が自由と平等の重要さに気づき、自らの体験を通してそれをコリンに教えている。彼女たちの教育は、あくまでコリンの経験を中心に行われたという点で、サムやジムの流れを汲むものである。しかし、コリンのこの決断は、アイクやハックのように、社会から距離を置くのではなく、積極的に社会と関わりを持つとする意志の表れでもある。文明から自然への隠遁、逃走ではなく、自然から文明へという、これまでの子どもたちとは異なる成長がこの作品では描かれている。それは、建国の理念を実現しようとするアメリカの向かうべき方向を示唆しているようにも思われる。

注

- 1 中沢によれば、神話が語られた社会では、人間と動物の間に越えられない溝はない。動物はいつでも毛皮を脱いで人間のようにふるまい、人間のことばを語り、一方、例えば、動物の性的魅力の虜になった人間の女性は、すすんで動物と結婚して、森の中に消えていくことができた。つまり神話という語りを通して、人間と動物の間に、「対称的」関係が築き上げられていた。そこでは、人間が動物に対して一方的に優位な立場に立つということが起こらないような仕組みがあった。神話を語る人々は動物たちを「野蛮」だとは考えない。なぜなら、動物たちは「自然」状態を生きることで、人間が容易に触れることも手に入れることもできない「自然の力」の秘密を握っているからだ。そこで人間は神話や儀礼を通して、動物との間に失われた絆を取り戻し、「自然の力」の秘密に触れようとした。このように、中沢は自然を征服の対象と見なす西洋的な考え方とは異なる自然観があることを提示している（中沢 10-11参照）。
- 2 「愛の連鎖」(chain of love) については、拙論「Truman Capote's *The Grass Harp* — “Chain of Love” の一考察」『PHOENIX』第42号（広島大学文学研究科大学院生英文学会 1994）: 120-133を参照。

引用文献

- Campbell, Joseph. *The Power of Myth*. New York: Anchor Books, 1991.
- Capote, Truman. *The Grass Harp and A Tree of Night and Other Stories*. New York: Signet Books, 1980.
- Coveney, Peter J. *The Image of Childhood: The Individual and Society: a Study*

- of the Theme in English Literature*. Harmondsworth: Penguin Books, 1967.
- Garson, Helen S. *Truman Capote*. New York: Frederick Ungar Publishing, 1980.
- Hoffman, Frederic J. “The Art of Southern Fiction: A Study of Some Modern Novelists.” *Truman Capote: A Primary and Secondary Bibliography*. Ed. Robert J. Stanton. Boston: G. K. Hall & Co., 1980.
- Lewis, Richard W. B. *The American Adam: Innocence Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago: U of Chicago P, 1955.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. New York: Oxford UP, 1996.
- 遠藤克弥・森田希一 「ジェファソンからマンヘーアアメリカ教育思想形成過程に関する一考察」 『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』 第29号 1989年
- 林信弘 『「エミール」を読む—ルソー教育思想入門』 法律文化社 1987年
- 元田脩一 『エデンの探求—アメリカ小説の一特質』 開文社 1963年
- 中沢新一 『熊から王へカイエ・ソバージュ II』 講談社 2002年
- 佐伯啓思 『人間は進歩してきたのか—「西欧近代」再考』 PHP 研究所 2003年
- 鈴木透 『実験国家アメリカの履歴書—社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡』 慶應義塾大学出版会 2003年
- 竹市良成・鈴木清稔 『新版 子どもの教育の歴史—その生活と社会背景をみつめて』 名古屋大学出版会 2008年

A Study of *The Grass Harp*: Collin's Quest for New Eden

Osamu Yamaguchi

Truman Capote's *The Grass Harp* is in the same American literary tradition as William Faulkner's "The Bear" and Mark Twain's *Adventures of Huckleberry Finn*, whose theme is innocent children learning lessons from their experiences in nature. In the end, Faulkner's Ike retires from society, Twain's Huck escapes from civilization, but Capote's Collin in *The Grass Harp* tries to enter civilization to become a lawyer. This paper aims to examine how *The Grass Harp* is similar to the two works, based on the idea of S. Motoda's "Quest for Eden" and Jean-Jacques Rousseau's idea of innocence, and to consider Collin's decision to become a lawyer.

In *Emile*, Rousseau asserts that children are innocent and must be protected from the malignant influence of adult society. He suggests an education in which children learn lessons through experiences in nature with minimal assistance from adults. Ike and Huck mature with the aid of Sam and Jim, who are men living marginally in natural and cultural worlds. Dolly is also a marginal woman who helps Collin find an Eden and to realize the importance of love and equality. These figures don't try to civilize the children but only assist them by hinting, like the ideal adult in *Emile*. In this sense, Collin is in the same literary group as Ike and Huck.

Though Ike and Huck stay away from civilized society, Collin chooses to stay in society and to become a lawyer. Although he loves the Eden in the woods where he lives with Dolly and other people, he understands his Eden can't survive long, because civilization must intrude into their woods eventually. He realizes his Eden can't be found in nature, so he decides to become a lawyer to create a new Eden in society through laws based on the ideals of the United States Declaration of Independence which, above all, proclaims equality.